

第61回 新潟県中越教育美術展 審査員

上越教育大学

教授 五十嵐 史帆



第61回新潟県中越教育美術展の開催、誠におめでとうございます。

60回を超える歩みを重ねてきた本展の節目となる年に、審査に関わらせていただけたことを大変うれしく思います。地域に根差した美術教育の実践が継続的に発表の場を得ていることに、本展の教育的意義を感じています。あわせて、本展を支えてこられた先生方並びに関係者の皆様のご尽力に、心より感謝を申し上げます。

今回、3・4・5歳児および小学校1・2年生の作品を審査させていただきました。作品に向き合い「どのような思いや体験から生まれたのだろう」「何を伝えようとしているのだろう」と想像を巡らせ先生方と対話を重ねる時間は、審査でありながらも多くの示唆を得る場でもありました。審査にあたっては、子ども自身の興味や関心を出発点とし、「ここをみて」「こんなふうに描いたよ」といった声が作品から立ち上がってくるような表現を大切にしました。

審査を通して特に印象に残ったのは、時間をかけて丁寧に描き込まれた作品が多く見られたことです。絵の具やクレヨンを重ねながら自分なりの色をつくり出している作品、芋掘りや水遊びなど生活の中で心に残った出来事や、宇宙や動物の家といった想像の世界を画面いっぱいに描いた作品、筆を弾いたり叩きつけたりしながら絵の具の特性を生かして水や花火の動きを表現した作品など、さまざまな表現が見られました。これらの作品からは、試行錯誤を重ねつつ、自分らしい表現に取り組む子どもたちの姿が伝わってきました。こうした、じっくり向き合い、自ら考え、選択し、形にしていく経験は、情報があふれ変